

# 日本人・日本文化はどこから来たか

阿子島 香

## [読む館長講座③]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年6月24日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」③

### はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。全8回は、次のような内容で進めていきます。「石器時代の経済学」「太古のアート：具象と抽象との間」「日本人・日本文化はどこから来たか」「教育と史跡：仙台城二の丸から」「隣の国と考古学1：サハリン」「隣の国と考古学2：韓国」「北米先住民と開拓者の文化財保護」「縄文の思考・弥生の思考と現代」の順でお話しします。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えていきます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。そして、両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

### 時代を超えて考える

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えてみます。私たちの郷土みやぎの先史時代、古代の文化遺産の内容は、世界各地の同時代、あるいは同様な文化段階や生活様式の文化遺産と比較した場合に、どのような特徴があり、どのような類似や相異が認められるのでしょうか、またそれはどのように理解していけるのでしょうか、当館長の独自の視点を含めて、探っていく予定です。どうぞよろしく、お付き合いください。（初めてのお客さまに、ここまで①から再掲です。また東北歴史博物館講堂にて、お待ちしております。）

### 民族の起源問題

今回は、「日本人・日本文化はどこから来たか」というテーマで、いったい私たちの祖先

は、いつ、どのように、そして何処から、この日本列島にやってきたのかという問題を考えてみます。もとより、多くの先学の研究蓄積が膨大にある分野で、また国民的な関心の非常に高い問題でもあります。(今日も、このように通常よりも多くの皆さんに起こしいただき、ありがとうございます。) 講座では、民族の起源問題とはどのような枠組みで研究されるかを整理し、そして日本列島への渡来年代について、また画期となるいくつかの時期について、考古学の面を中心に考えてみたいと思います。

講座の副題は、「**渡来・伝播・適応・変容**」としました。日本人の起源、その由来をめぐっては、まさに諸説が多く並列しています。私たちは、ともすると結論や仮説に眼がいきまして、どのように研究されたかということまでは一緒に考えない傾向があります。その仮説は、どういうことなのだろうか、いくつかの資料を通じて考えてみたいと思います。さまざまな説のことを「諸説あり」といい、当講座でもよく使います表現です。が、重要なのは、どういった資料のどういった内容から、どのような方法で、その説が出てきたかということです。大学の授業では、この点は基礎の基礎として重点的に講義をするのですが、諸説についての判断基準は、どの場でも基本的に変わらない大原則といえます。

### **フランツ・ボアズと総合人類学**

話題が広がるように思われるかもしれませんが、文化人類学での人間集団と文化の問題を少しだけ見てみましょう。人類学の諸分野をどのように考えるかについて、総合人類学を提唱したのは、「アメリカ人類学の父」(意識: "Papa Franz")とも言われたフランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) でした。ニューヨークのコロンビア大学で長く教鞭を取り、84年の生涯で非常に多くの人類学者を育成しました。その学風は、ボアズ流の文化個別主義 (cultural particularism) と位置づけられて、学界に大きな影響を与えました。個別の民族の集約的調査と実証的分析を重視しました。19世紀後半に支配的だった考え方の「文化進化論」には強く反対し、「文化相対主義」(cultural relativism) を主張しました。ボアズは、人類学を4つの分野の総合として考え、実践しました。それらは、自然人類学、言語学、考古学、文化人類学(民族学)です。総合人類学という原則は、クローバーやクラックホーンに受け継がれ、ひいては日本の戦後、人類学科整備のあり方にも影響しました(東大文学部、石田英一郎氏の考え方などがありました)。

今回のテーマである日本人の起源に合わせて、改めて考えてみましょう。「渡来」(arrival) は人間の集団がやってきたこと、すなわち身体的な面を分析することになります。「伝播」(diffusion) は、文化現象が伝わっていくことですから、人自身とは一致・不一致の両方があります。文化とは後天的なものであり集団によって共有されている実体です。文化を運ぶのは人ですが、人から人へ移るのも普通に起きます。「適応」(adaptation) は、人間集団の所与の環境との関係です。長期的な時間軸の中で、文化が変化していきます。環境が変動しますと、集団の存続に向けて、それに対応した文化変化が起きます。「変容」(acculturation) は、外部の文化との接触を契機として、自らの文化が変化していくことです。多くの場合、

強力な外来文化に影響される現象が研究されてきました。やや理論的な話で恐縮ですが、日本人の起源という場合に、簡単に「ここと似ているから、系統があるのだろう」とはならないことの説明でした。考古学の資料の場合、資料がモノであって「寡黙」ですから、どのように解釈していくかという点で、いっそうの注意が必要になります。

### クラックホーンによる概説書

総合人類学の古典的な概説書に『人間のための鏡』(Mirror for Man)があります(光延明洋訳、サイマル出版会 1971)。その中に人類学とはどういう分野かを説明する「奇習と土器と頭骨と」という章があり、総合的な性格を論じています。奇習は文化の意味、すなわち民族学、土器は歴史と文化、すなわち考古学、頭骨は遺伝と環境と進化、すなわち自然人類学の問題です。どのような資料を分析するのかという対象の問題でもあります。

著者のクラックホーン(Clyde Kluckhohn, 1905-1960)は、アメリカインディアンの研究者として著名で、北米南西部に居住するナバホ族(Navajo)の文化を専門としました。若き日にニューメキシコ州で療養した際に、インディアン文化に関心を持ち、1932~1934年にニューメキシコ大学で教鞭を取りました。その後ハーバード大学教授としてナバホ族の研究を続けました。実は館長は、ニューメキシコ大学に留学しており、ナバホ族の文化にもいくらか親しみがありますので、同氏の紹介をしました。アリゾナ州北東部からニューメキシコ州にかけて保留地("Navajo Nation")がある、最大の先住民集団の一つです。言語的には、北米北西部に多いアサパスカン語族に属します。友人にこの「ナバホ国」に勤務の考古学者がいました。伝統的文化では、木組みと土の住居「ホーガン」に住み(平原インディアン諸族のテント住居であるティピー, Tipi, Teepee とは好対照です)、芸術的な織物のナバホラグ、トルコ石と銀の工芸品、呪術の「砂絵」(砂の上に描く)などで、一般に知られています。

### クローバーと文化の概念

クローバー(Alfred Kroeber, 1876-1960)は、カリフォルニア大学の人類学者ですが、考古学の研究も行いました。20世紀前半では、民族学と考古学との双方を研究する人類学者はそれほど珍しくありませんでした。クローバーは、文化は独自の次元であるという「文化の超有機体説(super-organic)」理論を展開しました。人間集団、あるいはその個体が有する生物学的ないし有機的(organic: 有機農業などの有機です)な属性に、文化現象を還元して理解することができない。文化とは、文化自体で理解する法則に従う、異なる次元の現象として分析すべきであるという、当然といえば当然ですが、よく考えると難解な哲学的議論の領域に踏み込みます。クローバーはボアズ門下の有力な研究者で、また言語学(言語人類学)の領域ともクロスオーバーしていました。文化と言語は表裏一体で、人間のみに特有の次元という理解が背景にあるといえるでしょう。言語人類学のエドワード・サピアとの往復書簡集も公刊されています(カリフォルニア大学バークレー校 1984)。またクローバー

は、クラックホーンと共著で、文化人類学説史を検討し、いったい「文化 (culture)」とは、どのように定義されてきたかという著作をまとめています (ハーバード大学 1952)。

レスリー・ホワイト (Leslie White, 1900-1975) は、新進化主義人類学の泰斗で、ミシガン大学を拠点に、ボアズ流の個別歴史主義人類学、文化類型論とは対極にある学派を創始したと評価されます。しかし、文化の概念については、共通の点すなわち、人類独自の次元として、クローバーの超有機体説と一脈通じる考え方をしていた点は、興味深いことです。ホワイトは「文化学 (culturology)」を唱えて、文化を技術的文化、社会的文化、イデオロギイ的文化の 3 側面に分け、技術が最終的な決定要因であると考えました。ミシガン大学でホワイトの学問的影響下にあったビンフォード (館長講座に繰り返し登場) の文化理論にも大きく影響しました。

以上、郷土史という関心からはやや異質かもしれませんが、人間集団の移動、文化の系統、文化の伝播などに関係する人類学的理論を紹介してみました。広義の人類学には、4 つの研究分野があること、20 世紀前半から半ばのアメリカ人類学において総合化が図られたこと、「文化」という概念が非常に重要であったこと、これらが要点です。日本人の起源という際に、そこでは何を論点・問題としているのだろうかという理解に役立てば幸いです。

## 列島へ・列島から

さて、日本列島の地理を見ますと、アジア大陸から渡来してくる道筋として、限られたルートが仮説の対象になります。北ルート、これはサハリン経由で北海道方向にくる人・文化の波です。西ルート、これは朝鮮半島経由で、九州北部に上陸してくる人・文化の波です。南ルート、これは台湾方面から南西諸島の島伝いに、沖縄・奄美・南九州と渡ってくる道筋です。他にも、いくつもの可能性はありますが、**旧石器時代、縄文時代、弥生時代**などの「**日本人の起源**」を考える際の主要なルートは、上記の 3 ルートといえます。さまざまな仮説も、これらの関係をめぐるものが多いです。

そのほかの可能性も考えてみましょう。沿海州方面から直接に東北地方や北陸の日本海沿岸へという日本海渡海ルートはどうでしょうか。このルートは海洋民文化を前提とするでしょう。沿海州から朝鮮北部の古代に繁栄した「渤海国」(698~926 年) からは、30 数回の「渤海使」が派遣されました。唐王朝は渤海国を「海東の盛国」と称したこともあります。日本海側の玄関口のひとつは、秋田城でした。古代の水洗トイレ遺構発掘と復元的话题を記憶する方もいらっしゃると思います。

また中国南部 (華南) から、直接に九州方面へというルートもあります。大陸棚が陸化して東シナ海が狭かった寒冷期には、半ば陸路といえました。温暖化の後では、歴史的に海流や風を利用して貿易コースになっていました。西日本の縄文文化と、華南から雲南、さらにアッサムに至る「照葉樹林文化圏」との関係を考える学説では、重要なルートといえます。

北の方では、北方領土 (古北海道半島の一部) から千島列島の島伝いに、カムチャツカ半島方面、そしてさらにアリューシャン列島、あるいはベーリンジア平原 (寒冷期にはベーリ

ング海峡が陸化していて、アラスカとつながっていた状況)を經由して北米大陸というルートもありました。このルートは、ホモ・サピエンスの移動方向からいえば、一方通行の東北方向向きでした。旧石器時代末期に日本列島では、石刃技術の発達が顕著で、また石槍の文化(尖頭器文化)が高度な展開を見ました。それらの系統の一部が、海伝いに北米に到達して、その後パレオインディアン文化につながったという仮説もあります。年代と石器文化の技術的な比較で、今後検証していくべきでしょう。(ただし海面が低下していたので、当時の遺跡の相当数は、現在は海中に没していると予測されます。南方では台湾西方の澎湖水道から古人骨が引き上げられた事例もあります)。

南の方では、伊豆諸島から小笠原諸島という、南海ルートもあります。先史時代には、果たしてどうだろうかと懐疑的なイメージを持たれるかもしれませんが、しかし、先史時代の太平洋の航海民は、驚くほど高度な遠洋航海術を持っていて、星を見ながら大洋を渡っていました。ポリネシアの考古学が教えてくれます。

### 極北から南海まで

ホモ・サピエンスの時代となって、人類は初めて、地球上のいたるところに拡散を遂げました。熱帯雨林から砂漠まで、人類が生息していなかった場所はまれといってよい状況になりました。人類が北米大陸に到達(プレ・クローヴィス文化。ペンシルバニア州メドウクロフト岩陰、オレゴン州ペーズリー洞穴群、テキサス州ゴールト遺跡下層など)してから、1000~2000年程度で南米南端近くに足跡を記し(チリ南部のモンテ・ヴェルデ遺跡、約14000年前。最下層には異論もある)、近年チベット高原でも後期旧石器文化が発見されています。しばしば世界の寒極とも称される北シベリアのヤクーチア地方では、後期旧石器文化の遺跡にマンモスハンターの拠点とされる遺跡もあります。ジユクタイ文化(3.5?~1万年前)が代表的で、楔形石核の細石刃も発達していました。北極海沿岸の河口にも遺跡が残されています。まさに、「逞しきものたちよ、汝の名はホモ・サピエンスなり!」であります。日本列島への拡散についても、約3万5千年前からの遺跡数の増大は目を見張る状況があります。このことは、日本人の起源という脈絡と同時に、地球的な人類拡散の一部分として理解されるべきことであります。

日本列島周囲の、いくつものルートを考えてみました。ここで、現代日本人の歴史観では、海外からの流入という発想が強く、列島から外に広がるという考えがあまりないことに気づきます。ひょっとしたら、先のアジア太平洋戦争の反省もあって、内向き思考が大きくなっているのかもしれませんが。グローバルな人類史を見れば、人間集団の移動、文化の移り変わり(文化的な伝播)は、多くの場合、双方向的におきます。日本列島の歴史の場合でも、いつも外から一方的に人や文化がやってくるという前提も、あまり根拠があるとはいえないでしょう。「日本列島へ」は、同時に「日本列島から」という可能性も持っているのです。一般に、人間集団や文化の移動のルートは、また異なる集団や文化の間を結ぶ交流の道となっていたルートでもありました。

ここで深入りはしませんが、逆にネット上の言説の中には、「日本民族の優秀性」を強調する方々もあり、例えば、土器の発明は日本が世界最古（中国のデータは信頼できない）、定住文明は日本が誇る縄文に存在（古き日本文明）、大陸から多くの難民を受け入れた優位な古代日本、のような表現もしばしば見受けられます。しかし私たちは、さまざまな資料を総合的に考えるべきであって、ある前提に立った見方を優先させて資料を取捨選択すべきではないだろうと思います。

## 寒冷な時代の列島の姿

地球の気候は、長期的なサイクルで寒冷と温暖を繰り返してきました。およそ 10 万年の周期で変動してきました。現在は、約 1 万年前に急激に温暖化した、その先になります。寒冷な時代を考えますと、最終氷期の最寒冷期には、東シナ海の大陸棚は広大に陸化していましたので（地図スライド）、九州への距離は小さかったわけです。この時代では、「華南ルート」は、高度な渡海術を前提としなくても可能なことでした。同じ最寒冷期に、サハリンと北海道はつながっていて、「古北海道半島」を形成していました。のちに見ますように、その後でも北海道の先史文化は、本州と違った様相を見せる時代も何度かありました。

最寒冷期には、本州、四国、九州はつながっていて、「古本州島」といわれる大きな陸地でした。大きいと言っても、島国の感覚でのサイズではありますが……。

旧石器時代の日本列島に生息していた動物群は、大きく北方系と南方（西方）系に分けられます。北からマンモスやヘラジカなど、西からナウマンゾウやオオツノジカなどがやってきました。

次に、大陸と列島間の、主要な 3 大ルートについて、見てみましょう。

## 南のルート「海上の道」

よく知られている学説に、日本民俗学の創始者であり確立者であった柳田国男氏（1875～1962）による『海上の道』（1961）があります。日本人の祖先は大陸の稲作を携えて、琉球から島伝いにやってきた、さまざまな習俗や儀礼、言葉、神話が示すところという説です。氏の最晩年にまとめられた学説は、半世紀にわたって温められてきた考えの集大成とも言えるものです。明治 30 年夏に、三河（愛知県）渥美半島の西端、伊良湖崎で、海岸に漂着した椰子の実に出会った逸話が『海上の道』にあります。島崎藤村は、柳田の話に触発されて『椰子の実』という詩を著し、のちに昭和 11 年（1936）に曲が付けられて（大中寅二作曲）、ラジオ国民歌謡として愛唱されました。

歌詞を朗読してみましょう。「名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実ひとつ 故郷（ふるさと）の岸を離れて 汝（なれ）はそも波に幾月 ……以下略……」。今でも昭和歌謡の代表的な歌のひとつで愛されています。この叙情歌に、日本民族の起源、稲作農耕の来た道、南島の文化、他界観（あの世・ニライカナイ）、タカラガイの考察など、柳田の晩年の名著の原点があったということも、次に口ずさむ時には、ぜひ思い起こしていただけれ

ば幸いです。

さて近年では、国立科学博物館（現東京大学）の海部陽介氏が主導した「3万年前の航海プロジェクト」があります。後期旧石器時代の初めに、人々は台湾から、黒潮を越えて、琉球列島にやってきたという仮説を検証するための**実験考古学（実験航海）**です。いろいろな舟で試行して、ついに丸木舟で列島に到達しました。

また、琉球列島での旧石器時代人骨の発見には、目覚ましいものがあります。代表的な遺跡は、八重山諸島石垣島の白保竿根田原（しらほさおねたばる）洞穴で、新石垣空港の敷地内にあり、空港建設中の2007年に発見されました。沖縄県立埋蔵文化財センターを中心に学際的な調査が進められました。令和2年に国史跡に指定されました。人骨は1000点以上出土し、少なくとも19体以上で、全身骨格がほぼ残る個体もあります。27000年前という年代測定もされています。

### 西のルート：朝鮮半島経由

西ルートでは、弥生時代の早期に、**朝鮮半島からの稲作農耕文化**が、北九州に上陸し、弥生日本文化の起源になった事実があげられます。列島の他の地域は縄文時代晩期の文化でした。佐賀県唐津市菜畑遺跡では、水田遺構が1980年に発掘されました。日本の稲作文化が、紀元前10世紀まで遡るといふ年代測定値（高精度のC14年代測定法であるAMS法による成果）は、大きな反響と論議を呼びました（今も諸説あり）。

さらに遙かな昔の25000年以上前、後期旧石器時代の中頃には、朝鮮半島で多くみられる**スンベチルゲ**（有茎の刺突具、日本考古学で「剥片尖頭器」）という石器が九州を中心に流入しました。鹿児島県の始良火山のカルデラ大噴火により、日本列島の環境は激変しました。約3万年前の出来事です。噴出した火山灰AT（始良Tn火山灰：Tnは標識地の丹沢の略）の上と下とで、石器の様相の変化が認められます。スンベチルゲが九州に入ってきたのは、この時期でした。動物・植物などの生育環境が変化して、人間集団が韓半島から九州へ流入してきたと解釈されています。

最近、スンベチルゲは東北地方にも認められることがわかってきましたので、ご紹介します（スライド）。韓国光州市（仙台市と姉妹都市）にある朝鮮大学校の考古学者、李起吉（Lee Gi-kil）氏は、東北大学総合学術博物館客員教授として、文学研究科考古学研究室に滞在し、私たちと共同研究を行いました（2012年度）。石刃石器群を中心に、考古学研究室の発掘資料を直接に観察されて、その中にスンベチルゲとして分類し、理解できる石器があることを指摘されました。氏は韓国で全羅南道ジングヌル遺跡など、多数のスンベチルゲ石器を出土した遺跡調査を手掛けてこられました。この石器研究の第一人者です。その成果は、「日本東北地域出土のスンベチルゲ（剥片尖頭器）の研究」として発表されました。（*Bulletin of the Tohoku University Museum, No.13, pp.1-11, 2014*）。雑誌名は英語ですが、文章は日本語です。東北大学附属図書館の「機関レポジトリ」から、どなたも無料ダウンロードできます。

(スライド) 山形県新庄市上ミ野 A 遺跡、舟形町高倉山遺跡、福島県会津若松市笹山原 No.16 遺跡など、当講座で以前に紹介しました遺跡でも出土しています。また秋田県地蔵田遺跡、下堤 G 遺跡、岩手県峠山牧場 I A 遺跡、新潟県樽口遺跡など、広範囲に広がっていることが判明しました。これらの石器は、日本考古学ではおおむね、「ナイフ形石器」として分類されますので、韓国のスンベチルゲとの比較という視点はこれまでになく、重要な指摘と考えます。今後、同様な視点で日本全国の石器を見直していくことも必要であると思います。また AT 降灰以前である出土資料も含まれています。これからは、九州地方の「剥片尖頭器」とはまた別の視点で、東日本と韓半島との比較研究を進める必要性も感じられます。

### 北のルート：サハリン経由

北ルートの事例としては、後期旧石器時代の末期に、**北方からの細石刃文化**の南下があったことをご紹介します。石器製作技術の粋を尽くしたとも評価される小型の石刃を製作する文化は、シベリア東部に起源がありますが、**25000 年位前**に当時大陸と陸続きだった北海道「半島」に流入して定着しました。そして約 **17000 年前**には、津軽海峡を越えて東北地方へと南下してきました。東北大学考古学研究室による**山形県大石田町角二山遺跡**の発掘調査を紹介します。角二山遺跡は、最上川の河岸段丘上に立地し、**1970 年**に職業訓練関係の県立学校建設に伴って発見され、加藤稔氏により調査が実施されました。東北地方にも細石刃文化が存在したことを、初めて明らかにした学史的な遺跡です。

芹沢長介先生による日本列島の細石刃文化発見であった長野県矢出川遺跡（1953）、アジヤ地域に広がる特徴的な彫刻刀（荒屋型彫刻刀）と細石刃を明らかにした新潟県荒屋遺跡（1958）に続いて、東北地方の角二山遺跡は、標識的な遺跡とされてきました。細石刃は長さ数センチのカミソリの刃のような石器を多数、連続製作して、骨角や木の柄に並べて装着し、武器として使用する組み合わせ道具です。石核には、「湧別技法」を含むクサビ形になるタイプと、角柱形のタイプとがあり、荒屋や角二山は前者、矢出川は後者です。後者は古本州島の西半部を主に分布します。（石器の製作技術については、令和 3 年度館長講座概要第 6 回「**石器製作のハイテク**」参照）。

東北大学考古学研究室では、**2017 年から 2020 年**まで、鹿又喜隆教授を中心に、発掘調査を実施しました。（スライドで、加藤稔氏の調査、当時の出土資料、同氏の著作、**2017～2020 年度**の発掘風景、層位状況、石器の出土状況、石器組成、石器出土分布図、学会発表資料は「東北日本の旧石器文化を語る会」から、多数紹介）。

鹿又・青木・佐々木・阿子島ほかの「後期更新世における津軽海峡を越えた黒曜石の運搬」（原著英文、**Quantifying Stone Age Mobility, 2022 Springer** 所収）から、北海道北東部および男鹿半島の黒曜石原産地から、角二山をはじめとする東北地方の遺跡に、どのように石器石材が運ばれて製作されていたかを紹介しました。蛍光 X 線分析という方法を駆使して、北方系細石刃文化の南下の状況が、具体的に解明された成果です。おそらく最初の南下集団が、男鹿半島を経由して集団合流し、角二山遺跡の地で在地石材である頁岩を使用して



同じ技術を定着させたというシナリオが可能です。今から約 18000 年前であることが、年代測定で明らかとなりました。日本人の由来に関する北ルートを示す事例の一つです。

## 列島最初の住人たち

日本列島最古の住人は、約 7 万年前～4 万年前の大陸での中期旧石器時代に遡ることが、近年確実になってきました（ただし館長の学説です。この問題には、なお議論が多くあります）。大分県早水台遺跡、群馬県鶴ヶ谷東遺跡、岩手県金取遺跡など、数十か所が指摘されています（スライドで遺跡と石器を紹介）。石器文化には、アジア大陸との共通点が認められます。（令和 3 年度館長講座概要 第 3 回「ホモ・サピエンス東北へ」参照）。

日本列島に特に顕著なこととして、後期旧石器時代の爆発的な遺跡数の増大があげられるでしょう。日本旧石器学会は、日本列島のすべての旧石器時代遺跡のデータベースを作成しました。後期旧石器時代に属する遺跡数はのべ 14500 以上にのぼり（「のべ」は、重層遺跡をそれぞれ数える意味）、世界的に見ても非常に高密度で存在しています。4 万年より前には、疑問があるとされる遺跡を含めても、二桁の遺跡数しか確認されていない状況と比較すると、その違いは、「爆発的」といえる勢いです。

後期旧石器時代以前の人類集団の状況については、先年の館長講座で（令和 3 年度第 3 回）、「小集団連続絶滅仮説」を提示しましたところでした。アジア大陸からやってきた集団は、旧人段階ということからの文化的水準、島嶼という環境での資源の変動、集団間の紐帯の限定、移動範囲の限界、集団再生産の先細り、文化力の低下（石器製作の退化）など、複合的な要因によって、結果的に適応放散に成功せず、やがて絶滅に至った集団もあって、そのような状況が数万年間にわたり継続した可能性を問いかける仮説です。今後、検討していく所存です。

## 新人類の日本列島への適応放散

約 38000 年前に遡るホモ・サピエンスの日本列島への到達は、このような状況を劇的に変えたと考えられます。先住の人類集団は、やがて同化・吸収されていった可能性もあると考えています。ヨーロッパでの新着クロマニヨン人と先住ネアンデルタール人との関係では、そのような状況が起きていたようです。日本列島の環境に応じた、独自の適応・放散が進みました。石器では、基部を調整した台形石器、台形様石器、ペン先形ナイフなどの一群と、刃部を主に研磨を加えて製作する世界最古級の部分磨製石器とを組み合わせました。東日本を中心に、環状の形の大形キャンプに集団はまとまり、おそらく大型獣の狩猟に成功していました。ほどなく石刃技術が一般化し、ナイフ形石器が製作されるようになりました。東海地方などでは、落とし穴狩猟も行なわれていました。

最初の集団がどちらのルートで渡ってきたのかは、まだ判然としません。最新の研究では（奈文研の国武貞克氏による）、長野県佐久市の香坂山遺跡（2020 から調査）におきまして、ユーラシア大陸の IUP（初期後期旧石器時代）の特徴を持つ石器群が発掘されています。大

型石刃、尖頭形剥片、小型石刃などです。『日本旧石器学会ニュースレター』46号、他)。初期後期旧石器時代とは、ロシア・アルタイ地方のカラ・ボム遺跡などで知られる石器群(ペトリン氏調査資料の館長撮影スライド)で、ユーラシアに広く分布することが近年の比較研究の課題になっています。中国の寧夏回族自治区にある水洞溝遺跡、韓国の忠清北道にあるスヤング遺跡第6地区なども、IUPの石器群です。45000~40000年前の各地域の状況が、焦点になっています。東北大学東北アジア研究センターの佐野勝宏教授が、コロナ禍による制限の中で、対面方式で開催された国際シンポジウム(2022年9月)でも、大きなテーマでした。私も同席させていただきました(『日本旧石器学会ニュースレター』52号に、佐野先生の解説があります)。

なお、ニュースレターは、[日本旧石器学会](#) で [検索](#) により、どなたにもオープンアクセスとなっております。

### 日本列島の地域性の起源

遺跡数の爆発的な増大が示すように、人口の拡大が継続しました。25000年位前になりますと、列島内各地で、**特徴的なナイフ形石器**が発達し、地域性がはっきり出てきます。東北、関東、甲信越、関西、九州などの「ご当地(?)文化」の確立は、2万年以上前に起源を持つのでした。ナイフ形石器の地域性は、石器の石材とも関係していました。東北の大型石刃を素材にした東山型ナイフ、やや小型の石刃による杉久保型ナイフなどは、頁岩の原産地に顕著に発達しました。関東地方では、石器の材料に適する石材が比較的少ないこともあってか、短い2側辺加工のナイフ(茂呂型ナイフを含みます)が盛行しました。近畿地方から瀬戸内にかけては、横に長い形の剥片を連続剥離して作成する素材(翼状剥片)に調整を加えた国府型ナイフが製作され、サヌカイト(讃岐岩、緻密な安山岩)を材料にしていました。

後期旧石器文化が始まってからの2万年間くらいで、日本列島には相当数の人類集団が、地域性をもって居住するようになっていたと考えられます。具体的に何万人がいたのか、現在の考古学では、まだ明らかにすることはできませんが、東北、関東、中部高地、さらに西の各地域から九州まで、のちの縄文時代に認められる地域のまとまりに比べればより広いけれども、いわば原型が次第に形成されてきたようです。その間、スンベチルゲや北方系細石刃文化の事例でみましたように、何派にもわたって、各方面から、人間集団の移動(渡来)もあったと考えられます。文化の流入(伝播)、地域環境への対応(適応)、外来文化・集団との接触による変化(変容)もあるので、問題はより複雑になってきます。

いずれにしても、おそらく後期旧石器時代の中に、のちの日本人の原型になるような人類集団が形づくられてきたと考えています。館長学説では、「原日本人の集団」は、縄文時代ではなく、既に旧石器時代に形成されていたと考えるものです。その要因としては、ホモ・サピエンスの一般的な性質、すなわち一旦その地域での環境適応に成功する文化内容が確立すると、どんどん個体数が増加するという性質があるということです。別の例では、氷河時代末期に、アジアから北米大陸へと渡った人類は、大型動物が豊富な新天地において、

かなりのスピードで増えて、南米まで至ったという歴史もあります。

なお、アジアから北米大陸への移動経路については、カナダの大部分をおおっていた氷床 (ice sheet) が小さくなりカナダ西部に南北に細く開いた「無氷回廊」を経由したとされてきました。そしてクローヴィス文化 (約 13000 年前から) が全米を席捲したという考えが定説でした。しかし、プレ・クローヴィスの遺跡が次第に確実になってくると、ローレンタイド (東)、コルディエラ (西) の両氷床間に無氷回廊ができる年代と合わなくなってきました。現在では、最初の人類移動は、西海岸沿いに南下したという考えも有力になっています。そのルートを、「海藻の高速道 (Kelp highways)」と呼ぶこともあります。この場合、多くの遺跡は海中に没していると推定されます。新人はあらゆる土地に、可能なルートと適応方法で、どんどん広がっていくという本質があることを示しています。旧人とは比較にならない高い文化力のなせるわざといえるでしょう。

### 後期旧石器から縄文へ

条件が整うとホモ・サピエンスはどんどん増えるなどと、まるで生物種が増殖するような表現をしますと、不快に感じられる向きがあるかもしれません。しかし、世界各地の多様な状況を比較していく一つの視点 (比較考古学の視点) として、意味のある思考の枠組みであると考えられるものです。多様な環境条件に対して、人間集団の側の対応があり、環境と人類との間に相互作用の複雑な状況が生じます。民族学では、1960 年代あたりから、このような「生態人類学」の実証的な分析が、特に狩猟採集諸民族を対象にして研究が蓄積されてきました。環境の重要性という、何か「環境決定論」のようなニュアンスを感じられるかもしれませんが、決してそのようなドグマは無く、両者の相互関係を考察しようとする分野であり続けています。生態人類学の実際は、かなり文科系的でもあります。

第一に、人類は、その部族 (より大きくは、民族) 特有の「文化」を有する存在ですから、多様な文化ということの、その意味についても人類学の学説史を辿りながら考えてみました。学史を 100 年近くも遡ったお話になりました。最近とみに感じるどころですが、遠い先学たちの業績、すなわち研究史への軽視があるのではないのでしょうか。新しい研究を追っていくことは重要ですが、どのような先人たちの営為の積み重ねの上に、現在の研究状況があり得ているかということ、忘れてはならないと思います。人類学・考古学の研究という分野に限ることではなく、多くの分野に共通する課題であるような気がいたします。

さて、日本列島の後期旧石器時代では、集団が大きな部族のようなまとまりを持って存在していたかどうか、議論のあるところでしょう。後期旧石器時代の集団は、相当に広域的な移動生活を確立しており、また特定の石器技術体系が「飛び地」のように離れて認められることもあります (山形県越中山 K 遺跡、同上ミ野遺跡、岡山県恩原遺跡など)。その地域性は、使用石材とも関連する相当に漠然とした広がりを持っていました。人口密度と広域的移動を考えますと、「集団領域」(テリトリー) という土地の認識は、まだ存在していない段階と考えられます。

のちの縄文時代においては、ある時期に土器の型式によって捉えられる大きな人々のまとまりができたようです。旧石器時代に、既に大木式土器文化圏や、円筒土器文化圏のようなまとまりが、存在したかどうか、将来の検討に待ちたいと思います。後期旧石器時代は、新進化主義人類学の類型論では、「バンド社会」の段階であって、より大きく集団がまとまっていくメカニズムができる、「部族社会」に至るのは、縄文時代の前期頃ではないか、というのが館長の考え方です。

定住（通年ないし季節的）生活は、一時的な滞在地としての様々な地点を同時に組み合わせとして持っていたのが実態と考えられます。気候の温暖化や冷涼化が影響して、集団規模の集中や分散も生じましたが、分散居住しても小集団間の繋がりは（おそらく血縁および婚姻関係による祖先集団の紐帯か？）、維持される仕組みがあったと思われます。新進化主義人類学のエルマン・サーヴィスが論じた「汎部族的ソダリティ（pan-tribal sodality）」の存在を追究していくべきでしょう。

一方で、縄文時代の草創期や早期の土器型式は、かなり広域的な分布を見せており、それ以降の時期とは地域性のレベルが違うようです。集落規模にも落差があります。ユーラシア大陸的には「中石器時代」的様相といえるでしょう。（令和3年度館長講座概要 第8回「縄文への道」参照）。土器の出現から稲作農耕の波及まで、長大な時間と広大な地域が「縄文文化」というひとつの文化としてまとめられているのが現在の定説ですが、はたして同一の文化として考えるべきものかどうか、前半と後半、東日本と西日本、それらの多様性を見れば、アジア大陸であれば「別の文化名」が付けられるほどの相異が認められるといっても、過言ではないかもしれません。山田康弘氏（2015）も、先に同様な見解を提示しています。

また縄文時代の後半から終末に向かつては、狩猟採集生活は一種の行き詰まり状況となり、停滞的な文化の中で呪術的な要素が増大した。生産力が大きい、新たな農耕文化に変化する必然性があったという考え方も、かつては定説でした。確かに1950～70年代当時のマルクス主義歴史学の影響が大きい考え方だったのかもしれませんが。狩猟採集から農耕へという「進歩」史観から一旦離れて、生業経済をグローバルに比較していく中で、縄文時代とされる期間内の変動や、東と北への農耕の波及の問題を考え直していく必要があるでしょう（令和4年度第3回 読む館長講座「農耕をしないという選択」参照）。

### おわりに—日本人は何処から来たか？

日本人はどこから来たか？ 要点をまとめてみます（館長仮説です。異論もあるでしょう。今後の検討に期待します）。ホモ・サピエンスがおそらくユーラシア大陸北方の流れ（アルタイ、バイカル、中国北部、朝鮮半島経由？）から、IUP（初期後期旧石器）の時代に、日本列島に渡来してきました。そして約38000年前からの、**2万年以上の間に増えた人々が、その昔から列島に居住していたと考えます。**縄文時代以前に、のちに日本人の原型となるような集団が列島に定着していました。人々は列島の環境に適応して、後期旧石器時代前半は集団での大型動物狩猟、後半には高度な移動生活様式を確立しました。その間にも、幾度と

なく西から、北から、南から、人々は渡ってきましたが、地域全体に対して集団が入れ替わるような規模のものではなく、その都度の文化的刺激となり、人口の同化吸収、文化の（選択的な）吸収がありました。

そして縄文時代を迎えてのちも、原日本人と呼べるような集団は、地域それぞれに継続してきました。弥生文化への変化も、部分的な人の移動、文化的刺激でありました。形質人類学の研究が進んでいて、弥生初期の渡来集団は相当の規模であったとも考えられています。人気のある話題に「あなたは縄文顔、それとも弥生顔？」があります。西日本においては、縄文時代の照葉樹林文化圏の基盤の上に、稲作農耕文化への変化が急速に在地的に進行しました。東日本においては、中国東北部や沿海州などと共通する落葉広葉樹林文化圏（ナラ林文化圏）を基盤に、定住と高度な精神文化を発達させた縄文文化の上に、稲作農耕文化が重層的に展開し、東国的な弥生文化を形成しました。

古墳時代への変化も、今度は大陸との関係がクリティカルな要因になった中で（グローバルには、二次的文明としての初期国家成立）、列島内で社会と文化が進化していったと、個人的にはこのように考えているところでもあります。なお縄文、弥生、古墳の連続性、不連続性については、また別の機会に譲りたいと思います。明治時代以来の、膨大な研究史の上に、近年の先端的な研究が積み重ねられている分野です。

縄文時代の開始を画する**土器の起源**は、地球温暖化（寒冷の戻りを含めます）に伴う東アジア全体での文化変化として評価され、列島各地でほぼ同時的に出現する「土器」は、どこかの故地からの外来流入という様相ではありません。また日本だけが突出して古いものでもありません。最古の土器出現遺跡の一つとして、青森県大平山元Ⅰ遺跡があります。約16500～15500年前のことでした。長崎県福井洞窟や新潟県田沢遺跡の土器も、それほど離れた年代ではありません。（C14年代と、その較正年代の差であり、大きく違うように見える見掛け上の差です）。

日本列島各地にあった地域性は、縄文時代を迎えた後も、さらに弥生時代以降も、しっかり維持されていきます。私たち列島人は、「原日本人の集団」が形成された後期旧石器時代から、地域での多様な文化を持ったまま、その後何派にも及ぶ、各方向からの渡来集団と融合し、また外来文化の到来を、そのつど選択して取り入れてきたのでした。この意味では、**日本人・日本文化の唯一の故地は、実は存在しない**と言ってもよいでしょう。

ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、当日スライドを踏まえつつ、講演の内容に補足加筆し、改めて再構成したものです。なお参考文献は、日本語の比較的入手・閲覧しやすいものから選択しています。）

## 参考文献

- 阿子島香編（2015）『北の原始時代』東北の古代史 1、吉川弘文館。
- 岩宿博物館編（2022）『東北地方岩宿時代研究のパイオニア 加藤稔の研究業績』岩宿博物館第 76 回企画展図録。
- 海部陽介（2016）『日本人はどこから来たのか？』文藝春秋。
- 加藤晋平（1988）『日本人はどこから来たか ー東アジアの旧石器文化ー』岩波新書。
- 加藤稔（1976）『古代東北文化の源流』新人物往来社。
- 佐々木高明（1993）『日本文化の基層を探る：ナラ林文化と照葉樹林文化』NHK ブックス。
- 柳田国男（1961）『海上の道』（岩波文庫にて 1978）。
- 山田康弘（2015）『つくられた縄文時代 ー日本文化の原像を探る』新潮選書。